

# 子どもの現在からはじめる子ども理解

——子どもの生活環境からの理解——

杉山直子

## 要旨

子どもを理解するために、子どもの現在を知ることは必要であるが、時代や社会の現象や変容のなかでとらえて理解をしなければ一面的になってしまう。とりわけ1970～1980年代から食や生活に関する姿やからだのおかしさの問題が生じてきたが、おかしさを問題としその原因や対策を論ずることなく、子どもをとらえるのでは本当の子ども理解とはいえない。そのため、その背景にある生活環境について考察するとともに、教育活動の可能性として、子どもを中心に大人のためにも共に生活をとらえなおすこと、現在の子どもたちから大人たちへの発信することを提唱する。

キーワード：子ども理解、生活環境、発達疎外

## はじめに

戦後、子ども・若者に対して「現代っ子」「新人類」「宇宙人」という呼び方が存在した時期があったが、こうした呼び方をいつの間にかあまり聞かなくなった。筆者自身小学校5年時に担任教師から「現代っ子」の課題とさらに課題をもつ幼児の姿について聞き、同年代の課題と入学してくる5歳年下の子どもたちが過保護ゆえの発達上の問題等を聞き、育ちや環境が子どもに与える影響の不思議さを考えるようになった。また、便利なものがあふれる生活環境は、子どもが「不器用」「不健康」になるなどを知り、生活に関してとらえ直す機会を持た。生活環境が子どもを変えるのだ。このことは、大学に入り人間の発達について多方面から学ぶなかで、「発達疎外」という概念で理解ができた。手やからだを生活のために用いることの重要性和、その機会がない場合に単なる手やからだだけではなく、多様な他者との関係性などの様々なものを人間の発達から奪うのである。人間が環境に働きかけ働き返され発達するという弁証的な発達観に十分に光が当たっていない時代であったが、発達の源泉となる内的矛盾、全面的な発達の大切さを先進的に学ぶとともに、そうした発達観ではない大人たちの課題をすることもできた。その時に、子どもたちが学ぶことで大人・社会を変えていく力となることを学んだ。

本論文では、こうした意識のもと、1970～1980年代の子どもの発達の疎外的状況を紹介し、当時の子どもが大人・親となった約30年後の2000年代初めの子どもの生活環境について、主に食やからだに関する調査をもとに考察し、子ども理解の一側面と子どもの現在からはじめる教育活動の可能性について述べる。

## I 子どもの発達と大人がつくる環境

### 1、子どもの生活のくずれとからだ

ここに、1982年に発行された当時の子どもに関する特集号がある。そのなかで、「子どもの生活のくずれ」や「子どものからだの問題」を踏まえ、いかにして子どもの生活を創るかが教育課題として挙げられている。以下、その内容を簡単に紹介する。

「子どもの生活基盤をどうつくるか」では、川合章、藤原義隆、坂本泰造によるてい談が掲載されている。高度経済成長期から問題視されていたことが、さらに教育現場（小学校）で進行し、子どもの生活のさらなる乱れ・くずれが生じ、後50年も生きられるのかと心配されている。林間学校では10～11歳の子どもたちが頭痛・乗り物酔い・腹下し用・寝付かれないとき用・持病用の薬や目薬というように薬漬けの状態、離婚率が非常に高くなり学級の割以上を離婚家庭、子どもの生活がくずれ援助が困難。食生活のくずれが広がり、固く感じるものは食べない、加工食品の摂取が多く添加物漬け、塩漬け、砂糖漬け……こうした問題は日常生活にセットされているので大人も含めて見えにくく二重の危険性があることが危惧されている。そして、子どもが家庭の下宿人になり家庭生活における労働の役割をもたなくなってきたことなどが話されている。(p.2-21)「家庭環境」「食環境」のくずれと「からだを生活で使う経験」の減少による子どもの変化は、大人の生活そのものの問題点であり、当時の教師にとっては驚くべき子どもが生まれはじめた時代であった。

本書のなかに、正木健雄の問題提起もあり、体格も体力もよくなってきているが「疲れた」と言ったり「腹が痛い、頭が痛い」というようにからだの変調を訴えたりする子どもが多く、午前中からあくびばかりで授業にならないなど、今までの“疲れを知らない子ども”というイメージがなくなり、病気とも健康とも言えない子どもたちが出始めているということである。(p.38-48)これらは、子どもたちの生活そのものの変化が、人間としての発達そのものに影響を与え、不健康な状態を引き起こしているといえよう。

### 2、子どもの食環境の変化

子どもたちの生活環境や食環境の変化によるからだや心への影響に関して多くの調査が行われはじめたのも1970～1980年あたりからである。例えば、1981年に行なわれた「子どもたちの食生態調査」は、社会や子どもの生活の変化と食の乱れの関係を解明しようとした画期的調査であった。1982年に結果・分析が発表され、大人や子どもの生活の変化の事実と子どもの「ひとり食べ」が「現代食生活のキーワードのひとつ」と話題になった。当時の栄養学の専門分野では範囲外であったが、社会学・教育学分野での関心が高く、この調査をきっかけに家族で食べる回数や子どもの「ひとり食べ」の回数が「家族崩壊の指標」とまでされたが、多くの子どもたちは家族で食べることを求めている時代であった。

その10年後の1991年に追跡調査が行われたが、「ひとりで食べる」子どもの比率が高くなり、

それが日常化している子どもの場合は共食観（子どもが食事を家族と一緒に食べることへの思いや考え方）も貧困であり、両親の共食観も貧困であること等が明らかになった。そして、「ひとり食べ」から「孤食」という言葉が用いられ、この言葉が一般的になり、さらに孤食がなぜ悪いのかという論議も生じた。

1999年、1982年調査に「家族との共食行動」や小学校現場での声が反映できるように工夫され再調査されたが、その背景には新たな子どもの姿に関する現場からの声、とりわけ養護教員からの声があった。「保健室に『お腹がすいて、勉強できない』って駆け込んでくる子ども」の登場し、朝食を食べない子どものためにお菓子やおにぎりを用意する保健室が増加する傾向にあった。「月曜日になると、お腹が痛いていう子どもが目立つ」その理由が、「日曜日にファミリーレストランで食事をして、そのとき炭酸入りのジュースを七杯も八杯も飲んだ」や、特に、塾に行く子どもは「いつもコンビニエンスストアで自分の食べたいもの」であり、食事の提供の場とその内容も大きく変わり、自分の好きなものを好きなだけ食べることのできる状況になってきていることがわかる。筆者が考えるに、コンビニエンスストアの普及、ファミリーレストランでのソフトドリンクの飲み放題など利用者の欲求に合ったメニューの開発、親が食事ではなくお金を提供し好きなものを買うという考え方の広がりなど、食に関する企業戦略と社会や親の考え方の変化がマッチしたといえよう。

さらに、1999年の調査で明らかになったのは、「ひとりの朝食・夕食」という孤食化が進み、家族が家にいても自分の部屋で一人食べる個食化の姿がでてきたこと、「ひとりのほうが楽しい」という子どもが少なくないこと、栄養バランスの問題とともに食事の内容が単調で組合せがちぐはぐになってきたことである。（足立己幸、NHK「子どもたちの食卓」プロジェクト：2000）筆者が考えるに、これまでに加え、親たちが自由でいたい思いが個食を生み出し、その背景に「子ども部屋という個室」が普及し、さらにエアコン・テレビ・ゲーム機などの完備による家庭における子どもたちの個室へと追い込み、さらに「家族の個室化」を生み出したといえよう。そしてその後、携帯電話やパソコンの普及などの大きな変化は、「家族全体の個別化」への道筋を生み出してきたと思われる。

## II 2000年代初めの子どもたちの生活環境

### 1、共食の意義を知ろう—子どもが大人を変える教育—

岩村暢子は、首都圏に在住する1960年以降生まれた主婦（子どもあり）を対象とした家庭の食卓調査をした。そして「家庭の食卓の激変ぶりは若者や単身者の食実態以上にショッキングである」状況であるという結果を述べている。「食費はできるだけ節約」してディズニールランド、海外旅行、衣料品、お稽古事や趣味、インテリアや住居費、携帯電話代など「お金は他のことに使いたい」と言う主婦がむしろ一般的になり、特に30代前半では、8～9割の主婦がそう答える実態がある。削るのはまず日常の食費であるが、一方で夫や子どもの食事の際、お金を渡し勝手にさせる姿があるという。休日の朝は起きたくないのでも菓子パンを多く買い子どもだけで食べ

させる主婦も多いという。岩村によれば、遊びたい「私」指向の主婦たちの存在は、さらに助長する雑誌（食費の節約とブランド品など自分へのご褒美特集）などのメディアの存在により、「それが当たり前」にされていく傾向にあり、絶えず「ソーシャルスタンダードに合わせたい」、「自己愛型情報収集」に走る、「自分ペースの『単一プログラム指向』にあるということだ。（岩村暢子：2003）

全国的にみても、このような母親たちは確かに存在する。この価値観と行動様式は、子どもたちに与える影響は大きいですが、これを一つの影響として他の影響があれば選択する機会を持つことができる。そのために、子どもの生活を分析し、可能な対策を遂行していくことが必要である。

足立己幸は、1981年の調査以来、孤食の現象から、逆に共食の価値を導き出すことができた。孤食とは、「一人で食べる」、共食とは「家族といっしょに食べる」→「食事を共有する」から名づけられたが、「共食とは誰かと食事を共にする（共有する）こと」と定義し、「食事を共有する相手」「共有する食事の側面」「共有する食事行動の質」「食事を作る・準備する行動」や「食関連の情報を受発信し、食を営む力を形成する行動」の共有を入れ、ポイントで内容の吟味をすることを提案している。食育基本法が作成され、家庭・学校・地域のさまざまなネットワークで進められるようになった現在、「共食・孤食についても、“子どもたちが考え、発信する”こと、大人たちはその有力なサポーターという逆転の発想が必要」という主張をし、そうしたなかで、子どもたちが大人たちに共食の必要性を考えさせ、共に“我が家流の共食”のあり方をつくっていくことが可能であることを示している。（足立己幸：2010 p.13-21）親たちに向けて「子どものために」とお願いするのみではなく、「子どもから」「共に」を創り出し大人を巻き込む可能性があるのである。

大人においても、共食は意義を持つということも調査されている。健康食品会社「やずや」の研究機関で行った2008年全国の20代～60代男女886人を対象にした共食・孤食と疲れ・ストレスの実感についての調査結果では、孤食の頻度が高い・共食の機会が少ないほど、「いつも疲れている」「疲れを感じやすい」人が多くなること、また、孤食の機会が多いほど、不眠や憂うつな気持ちなどのストレスや疲れの症状—「眠れない」、「くよくよ考えてしまう」、「何をしても楽しくない」、「寝起きがよくない」—を感じる人が多いことが挙げられている。そして、40代男性の約4割が夕食を一人で食べており、30代・40代の男女の食生活の乱れが心配されている。（やずや食と健康研究所ホームページ）

このような大人たちに、「子どもから」「共に」は自分たちの生活環境を見直す機会をつくる。「共食は心を救う」が今後の健全生活づくりのキーワードになるのではないか。とはいえ、生活環境などの影響を受け、子どものおかしさは、からだの本質、心の本質の問題まで向かっているようだ。

## 2、「おかしい」をあたりまえにしない自分づくりをしよう

前述した正木健雄が中心とした子どもの“からだのおかしさ”の研究は、22年に及ぶ長期的な調査である。子どもに関するおかしさを実感する保育・教育現場（保育所、幼稚園、小学校、

中学校、高等学校)の縦の流れがみえる調査であり、さらに、子どもそのものの問題というより子どもの環境やそれとかかわる機会の問題を考えるものである。(阿部茂明、野井真吾、中島綾子、下里彩香、鹿野晶子、七戸藍、正木健雄：2011 p.65-85)本調査は1978年NHK特集「警告！こどものからだは蝕まれている」(1978年10月9日放映)を製作するために始められたことをきっかけに行われているが、1990年度以降は5年ごとに、とりわけ、保育者や教師がおかしいと思われる項目の追加をしている。1995年「平熱37度以上の子」「胸部異常の子」、2000年「保育中、じっとしていない」乳幼児、「異常と思われる痩身」、「授業中、じっとしていない」児童・生徒など。2005年には「つま先立ち歩き」「手足が冷たい」「口で呼吸している」「発音の仕方が気になる」「体が硬い」「床にすぐねっ転がる」子。2010年には「絶えず何かをいじっている」、「朝、なかなか起きられない」「夜、なかなか眠れない」「あまり水分をとらない子」「あまりトイレに行かない」乳幼児。「絶えず何かをいじっている」「朝、なかなか起きられない」「夜、なかなか眠れない」「うつの傾向がある」「あまり水分をとらない」「あまりトイレに行かない」児童や生徒。こうした調査により、今の子どものおかしさを、歴史的社会的にとらえることで、確かな対策を立てることが可能となる。

野間真吾の調査によれば、子どものからだのマイナス方向への変化は食い止められず一層さまざまな形で表出されつづけているという。「友だちや遊具にぶつかり額や頭部にこぶをつくる」幼児、「まばたきが鈍いのか、いろいろなもの(定規、はちまき、雪玉、消毒薬など)が目に入る」児童などの「気になるケガ」が挙げられている。「スポーツ少年団の遠征、対外試合が原因と思われる寝不足、疲労が特に月曜日にみられる」、「休日明けなどは、疲れた様子で2時間目くらいまでは授業にならない」児童というように、休日にからだを休めていない姿がある。“遊び”では、「入園までに、砂遊びや泥んこ遊びをしたことがない」幼児、「家でも公園でもゲームばかりしている」児童の姿がある。しかし、調査をし続けることで実体はかなり限定されているが、「SOSを深く受け止め論議することが大切」であることが述べられている。(野間真吾：2006 p.73-74)

このように、おかしさを子どものSOSととらえる観点が必要であり、大人になるにつれからだや心の本質に至る前に食い止めることが可能となろう。「すぐに『疲れた』と言う」長期的姿や中・高生徒の「夜、眠れない」「うつの傾向」の最近の姿を通して、大人社会をも含めた問題の奥深さと複雑さがあることを理解し、自分のからだの変化とその因果関係に敏感になり、一般的な姿と照らしあわせることが、筆者は重要であると考え。子どもには、体温、自分のからだの要求の意識・対応、からだの器官の名称や用い方に関する基本的な環境にかかわる課題が生じ、子どもたちの「疲れがとれにくい、精神的に落ち着かない、内面化している」姿は、現在の大人たちと変わらない問題が共通にあるといえる。「おかしさ」をあたりまえにせず、「自分のしんどさ」を表現し合い、共有し合い、子どもも大人も自分たちのからだや生活を共に見直し、子どもだから大切にすべきこと、大人だから大切にすべきことが分かり合える関係の構築が必要であるといえよう。「現在の大人を救うのも、未来の大人を救うのも、現在の子ども」という可能性が、教育活動には残されているのである。

文献一覧

- 川合章、藤原義隆、坂本泰造：1982「子どもの生活基盤をどうつくるか」『子どもと教育—子どもの生活づくり小辞典』あゆみ出版 p.2-21
- 正木健雄「子どもの心とからだを燃焼しきる場—「バタンキュー」で寝るのが理想—」『子どもと教育—子どもの生活づくり小辞典』あゆみ出版 (p.38-48)
- 足立己幸、NHK「子どもたちの食卓」プロジェクト：2000『知ってますか 子どもたちの食卓—食生活からからだと心がみえる—』NHK 出版
- 岩村暢子：2003『変わる家族 変わる食卓—真実に破壊されるマーケティング常識』勁草書房
- 足立己幸：2010「家族と“食を共にすること” 共食の大切さ」『親子のための食育読本』内閣府食育推進室 p.13-21
- やずや食と健康研究所ホームページ
- 阿部茂明、野井真吾、中島綾子、下里彩香、鹿野晶子、七戸藍、正木健雄：2011「子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・教育現場の実感—「子どものからだの調査 2010」の結果を基に—」『日本体育大学紀要』p.65-85
- 野間真吾：2006「子どものからだの現状からみた発達困難の今日の特徴と教育保健の課題」『日本教育保健学会年報』13 p.70-77